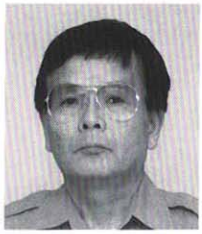
震災現場から――消防職員・消防団員の手記

阪神・淡路大震災発生直後の情報指令課の対応



尼崎市消防局警防部
情報指令課課長補佐　消防司令
川崎武一郎

平成7年1月17日（火）情報指令課指令第1係当務員は9名で、3名が勤務中、6名が仮眠中であった。午前5時46分頃、ドーンという音の直後に横揺れが激しく4階で仮眠中の6名は5階の指令室へ入るのが精一杯であった。この仮眠室から指令室まで真っ直ぐに歩くことが出来ず壁伝いに歩き、全員で指令管制業務の対応に努めた。

市内の5電話局から計32本の119番回線全てのランプが点灯し、7台の受付台で119番受報に対応したが、次から次へと出動要請があり、一時パニック状態に陥ったが市民の要請に全力を傾注した。

5時46分地震発生時から24時迄の間、119番受報件数は1,995件であった。地震発生後は同時多発火災発生の通報、救急要請、救助要請、ガス漏れ通報等119番要請が続いた。

多発火災については原則的に所轄対応でと、判断し無線で指令した。救急要請では指令員の適切な判断で重症者を優先的に救急出動させ、軽傷と思われる傷病者については、近くの病院を紹介し自力対応を要請した。更に救急隊員には病院の手配等救急隊員独自で対応させる等の非常事態であった。

また、ガス漏れ通報も続々と受報し、消防隊の出動もままならず、指令員がガス漏れに対する処置方法を指導し、応急措置を取るよう要請するなど一種の戦争状態であった。

6時10分第1号防災指令発令、防災センター3階会議室に消防部本部を開設、消防部長の指揮のもと指令室と連携を密にし、情報の収集、伝達、災害対策本部との連絡、各方面部への指示、指令を全課員が全力を挙げて行った。通信機器、特にコンピュータが万全であったのが大きな力であり又たのもしい限りであった。

兵庫県南部地震に伴う活動記録

尼崎市中消防署
消防司令補
本野新一

兵庫県南部地震の発生した平成7年1月17日午前5時46分には、中消防署の2階で仮眠中で、生涯味わったことのない経験をすることとなった。それは、筆舌に尽くしがたい激しい縦揺れと横揺れで、全く動けないまま10数秒の揺れであったであろうか、これは尋常ではないと直感し、事務所へ予備の携帯無線機を取りに行く。

1階車庫へ下り、出動に備えると同時に、「昭和通1丁目で、倒壊家屋に生き埋め、中3・中9・尼6出動！」との、指令が入る。

現場到着と同時に、再度驚嘆することとなる。木造2階建重層長屋の中央部分が、鋭利な刃物で切断したように縦に真っ二つに切れており、東側部分の2階と1階が完全にペシャンコ、とても生存者がいるとは想像できない光景である。どこが2階でどこが1階であったのか判然としない。要救助者の助けを求める声も聞こえないため、どこから手を付けて良いものか、皆目見当がつかない状態である。また、声を掛けても全く反応はない。

他の隊員と共に、手探りの状態で瓦等の瓦礫を取り除き救出を開始する。道具と言えばスコップ・バール、そしてこの2本の腕である。気は焦るばかりで数時間位した頃に、1カ所から「助けてくれ！」との反応があり、やっと高校生らしき男性1名を救出する。

その後も作業を続け、弟1人・妹2人を救出する。数時間後に、大きな梁の下に母親を発見するが反応はない。大きな梁をクレーンで持ち上げると、周囲の瓦礫がふさがって逆効果である。付近住民が「ノコギリ」で梁を切断してくれ救出できたが、結局助からなかった。救出完了したのは12時00分で、この時程無力感を味わったことはない。

今回の地震で、ユンボなどの建設資機材の重要性を認識した次第である。

大震災を体験して

尼崎市東消防署
消防司令補
河本博志

夜明け前の静寂の中、大地を引き裂くような轟音とともに都市生活を破壊した阪神・淡路大震災の救急活動は、地震発生直後の負傷した付近住民の駆け込みから始まった。電話回線の不通により収容先病院との連絡もとれず、病院の被害状況も把握出来ないまま救急隊の判断により当直医師との直接交渉から始まった救急活動は、終わりのないエンドレステープのような感さえあった。

家族の安否も確認できないまま災害活動に従事した職員。住居、家族に被害がありながら職場に参集した職員。全国の消防から被災地に寄せられた援助の手。この災害を通じ消防職員の強い使命感、誠実さと連帯感を感じ、消防職員であることを誇りに思ったのは私だけではないはずである。しかし、同時に自然災害の前に災害活動の限界を感じ、消防・救急に諸問題を提起したことも事実である。

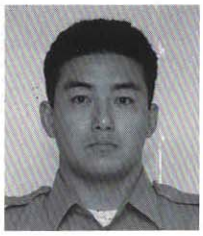
地震当日8時30分頃、全壊した家屋の中から60歳代の女性が消防隊によって救出された救急事案があった。彼女の顔は蒼白であったが、こちらの呼びかけに応じる程度の意識があり、頻呼吸、頻脈であった。近所のおばあちゃんが「がんばりや」と声を掛けていた。夫はこの女性の前に救出されたが、下顎の死後硬直が認められたため不搬送とした。傷病者は夫のことは何も知らない。何とか助かってほしいという感情がこみ上げてくる。搬送先を直近の救急告示医療機関と決め、機関員に告げ車を走らせた。酸素投与をしながら病院につくまでの数分間に意識レベルが低下、呼吸も弱くなり血圧は60㎜Hg迄下がっていた。全身を手で押さえながら負傷部位の観察を行うと骨盤に少し動揺が認められた。病院に着くと、隊員が直ぐに交渉に走った。この間にも傷病者のバイタルサインが低下して行く。隊員が収容不能ということを告げてきたので私は直ぐに医師と掛け合い状況を説明した。しかし、医師は処置室で負傷者の縫合をしており手が離せず収容できないと言った。このままでは心停止になると思ったため、医師に輸液を依頼した。医師が看護婦に輸液を指示し、救急車内で輸液をしていただき、輸液の急速滴下により何とか血圧を維持しながら関西労災病院に搬送することができた。

現行の救急救命士法では特定行為は心停止状態でなければ実施できないが、もし看護婦が輸液を実施してくれなければ、緊急避難的に自分で輸液を実施していたかもしれない。また、今回の地震では心停止状態であっても医療機関との連絡がとれず医師の指示が得られなかったため、現場で悔しい思いをした救急救命士も多くいたと思われる。

今回の地震では、平常時には十分機能している制度、法律が弊害となって柔軟な対応できなかったことが多々見受けられた様に思う。

震災から10カ月が過ぎ、ようやく市民生活も平常に近づきつつある。この教訓を今後にいかしていくことが震災を経験したものの使命であると感じた。

震災後の火災に出動して



尼崎市西消防署
消防士
橋本　貴

突然、激しい揺れに襲われ、仮眠室を飛び出した。1月17日未明のことである。車庫へ向かい、一斉に動きだした他の隊員と共に出動の準備を急いだ。

まもなく、家族が家具の下敷きになっているとの一報が入り、救急隊が救出に向かった。続いて通りかかった運転手から火災発生を知らされ、私は水槽付化学車で出動した。

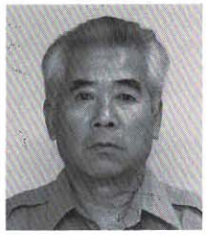
現場に到着すると、アパートの一室から炎が上がっている。中隊長の指揮により直ちに消火活動に入った。しかし、暫くして構えた筒先からの水が止まった。何事かと思いポンプを操作する機関員の方を振り向くと、消火栓から水は出ず、積載水も底をついたとのことである。一瞬、頭が真っ白になった。

それでも活動を止める訳にはいかない。気を取り直し近くの防火水槽をあたった。その間にも炎は猛烈な勢いで拡がって行く、無線は家屋倒壊や火災の続発を伝えている。応援隊の到着などとても期待できない。活動が困難を極めたそのとき、中隊長が私を呼んだ。中隊長は炎を吹き上げるアパートの外壁と塀の間にプロパンガスボンベが並ぶのを見逃さなかった。すぐに搬出しなければ危険な状態である。早速、取り外しに掛かった。今にも爆発しそうで冷や汗が出たが何とか無事に運び出した。間もなく西消防署のポンプ車が付近の防火水槽から送水を始め私は延焼を阻止すべく放水を再開した。必死で放水している最中、人の気配を感じて振り向くと、焼け出された男性が炎を見つめてたちつくしていた。あわてて筒先を置き安全な場所まで連れだした瞬間、私たちがいた所に燃え尽きた建物の一部が大きな音を立て倒れてきた。正に間一髪であった。

その後も、辺りがすっかり明るくなるまで懸命な放水活動が続きやっと鎮火に至った。

この火災で私は、地震直後の火災ではどれ程消火活動に不利な条件が重なるか嫌というほど思い知らされた。

恐怖の地震体験から



尼崎市北消防署
第1消防係長 消防司令
森本昭男

通信室を出ようとした時だった。ドーンと突き上げる激しい衝撃に一瞬「何だ！ これは」と、続いての激しい横揺れで「うわ！ 地震だ」と気づいたが歩くことが出来ず壁際で身を伏せるのがやっとだった。大きな揺れは20秒位でおさまったように感じた。

通信室の自動火災報知設備のブザーが鳴り響いていた。これは大地震だと直感し玄関を出て、庁舎被害等を調査したが大きな被害は見受けず、庁舎前の住宅街の道路はあまりの大きな地震の為か、人影はなく一種異様な静けさであった。直ちに全隊員の安全を確認、携帯無線機を開局、高所見張り、出動体制強化等の初動措置を指示しているとき、数名の人が駆けつけ「ガス漏れしている。」との通報を受け、出動を検討中、他管内で火災発生の無線を傍受、次いで管内の火災の駆けつけ通報を受け消防車2台で出動した。

現場に到着すると、傾いた木造長屋住宅1棟が炎上中で、タンク車は火掛かり、ポンプ車は消火栓に部署しタンク車に中継を指示したが給水不能の為、防火水槽に部署するよう指示した後、無線で応援要請したが「北署の2台で処理せよ」との返答、一時は呆然とする。水量不足のため直ぐに西側共同住宅に延焼した、ポンプ車からの中継送水を待ちながら、燃え盛る火をどうすることも出来ず悔しさが一杯で再度応援出動を要請した後、隊員と共に西側棟の傾いた木造共同住宅の一階窓から屋内進入し、腹這いで建物の倒壊危険に晒されながら人命検索をしたが応答は無く更に進入し検索中、この棟にも火が移り、顔が熱く耐えられなくなって、これ以上留まる事は危険と判断、断念せざるを得なかった。その後応援隊が到着し、防火水槽、学校プールからと遠距離中継送水により共同住宅等5棟を焼失して、3時間後に延焼を阻止し、7時間後ようやく鎮圧状態になったものの、行方不明者

が10数名あり休むこと無く、自衛隊の協力を得て、警察、消防との合同で捜索、２日間を要し不明者全員を確認、一旦活動を終了した。

帰署すると消防署は北部防災センターを併設しているため250名ほどの避難者でロビーや廊下にまで溢れており、５月上旬まで避難者の対応をしたがボランティアの方々の献身的な協力を得て貴重な体験をした。

地震当日の中隊長として非常に残念な事は、火災で11名の焼死者を出し、もっと何か出来なかったかと無力感で一杯である。もし、遠くても最初から防火水槽に部署を指示していたら、10t、20t程の水源車があったらもっと助かったのではと、色々思い浮かぶ反面、消防力には限界があり、地域住民の自主防災活動の意識づくりを進めることが大切なことだと痛感した。

阪神・淡路大震災における活動体験

尼崎市消防団
大物分団 分団長
宮元善雄

１月17日（月）５時46分、私は自宅の２階で就寝中、突然「ドーン……ガタガタ……」と激しい縦揺れ、横揺れのため慌てて飛び起きた。

水屋の食器等の破損があるものの、幸いにも自宅には大きな被害は無かった。

地元の被害等が気になったので懐中電灯を取り出し外へ出ると外はまだ薄暗く数名の近所の住人が心配そうに話をしていた。私は近所の住人に「大丈夫ですか、怪我は無かったか！」等の声をかけながら自宅周辺の被害の状況について見て回った。薄暗くて詳しい状況はわからなかったが壁及び瓦の一部落下等は認められたが建物の倒壊等は見られなかったので大物分団器具庫に行き消防自動車の出動体制を整えてしばらくした頃、無線受令器から「昭和通１丁目13－19で民家が倒壊し数名が下敷きになっている模様」等の一報が流れたため消防自動車で現場に向かった。

現場は木造瓦葺住宅の２棟が完全に倒壊し悲惨な状況であり、既に常備消防が到着、救助活動中であり付近住民が心配そうに見守っていた。又、伊達副分団長、堀連絡員等が救助活動の補助をしていたので私は団員に声をかけるとともに救助活動を実施し、12時00分頃まで続いた救助活動の結果、倒壊建物の下敷きになった６人中、１人が死亡したが５人を救出することが出来た。

救出後、一旦器具庫に戻り午後から集まって来た団員等と受持ち区域内の被害状況調査及びパトロール等を実施中、地域内でガス管の破損を発見したため中消防署に連絡するとともに同地域周辺の広報活動を実施した。又、受持ち区域内で道路の損傷があったため注意を促す広報活動を合わせて実施した。

その後の主な活動として、大物分団の市外応援活動は次のとおりである。

１月21日（土）９時30分から16時00分まで芦屋市潮見町、緑町付近の倒壊家屋等行方不明者の捜索及び救出作業等に機関員の松元信三君、団員の村上勉君そして私の３人が参加。

１月23日（月）８時00分から23時45分まで兵庫県庁救援物資集積場で、救援物資の搬入受入れ及び避難場所への搬入作業に団員の村上勉君が参加。

１月28日（土）９時00分から15時45分被災地（芦屋市）一斉ローラー作戦に参加。

以上が大物分団としての主な活動であるが、私は今回の大地震の体験、活動を通じて学んだ教訓を今後の消防団活動に生かして行きたいと思います。

終わりに、亡くなられた多くの方々のご冥福を心からお祈りいたします。

阪神・淡路大震災を経験して

尼崎市消防団
杭瀬分団 分団長
井内　進

阪神・淡路大震災、それは余りに突然で全く予期せぬ出来事でした。

私が消防団に入団してからの38年間の中で、最も短く又、最も長い1日となったあの日を、今も鮮明に覚えています。

体に激震を感じて目覚め、寝床から飛び出して立ち上がったものの、それからは身動きできずに居りました。震動が収まるまで待ち、家族の安否を確かめた私はすぐに分団器具庫へと向かいました。その途中で動揺した様子で外へ出ておられた数名のお年寄りが私の傍へ駆け寄って来られましたので、近所の自動車教習所へ誘導したのち、分団器具庫へ急ぎました。消防団員に非常召集をかけパトロールを指示し、杭瀬社会福祉連絡協議会会長に分団器具庫に待機している旨を連絡しました。

待機中に、各町会の役員の方々が防具も身につけずに通行して居られる様子を見て、常備してあるヘルメットを被ってもらったということもありました。

また、地域内のマンションの住民から救助の要請もありました。家具の下敷きになり、腰を負傷したが救急車が全て出動して来られないので病院へ搬送して欲しいということで、我々は直ぐさま近くの大隈病院へ搬送しました。

時間の経つにつれ、各所でガス漏れが続発したため団員が交代で日没まで警戒出動をしました。

後日、芦屋市消防団の方々と合同で住民の安全確認の為のローラー作戦を実施したとき、一人の消防団員が「私の父はこの倒壊した家の下で亡くなったのですよ」と話されました。家族を失い、住宅が倒壊し、全てが大混乱しているいる中、消防団員としての使命を果たすべく、無念さを堪えて活動しておられるその姿をこの目にして、涙がこみ上げてくる思いで、「これぞ、消防精神だ！」と感銘を受けました。

大震災は、人の心を荒ませただけではありません。正義と勇気をも呼び出しました。そしてこれを機に、今後も私自身が一消防人として一層力を注がんと心新たに決意しました。

震災と消防団魂

尼崎市消防団
道意分団 分団長
平山茂樹

阪神・淡路大震災に依り、犠牲になられた多くのみたまに哀悼の誠を捧げますと共に、遺族の皆様と甚大な被害を受けられ、また、仮設住宅で不自由な生活をされている多くの皆様に心よりお見舞い申し上げます。

震災後10カ月が早くも経過しましたが、今なお余震が絶え間なく続いている今日、市民の皆様には復興に向け力強い努力をしてこられたと思います。

激震とともに夜が明け、我が住宅街の変わり様を目のあたりにし、早々召集で6名の団員と地区の若い者15名で消防器具庫東側の道路上に30mにおよぶ崩壊した土塀の撤去作業と地区内の被害状況の確認、大庄支所内消防本部との連携をとり被害状況の連絡にと団員共々休む間もない日となった。

19日より3日間、芦屋市へ建物崩壊等による人命検索活動に参加した。尼崎市消防団員、消防職員、各副団長等70名が消防団長の見送り激励を受け出発、目的地芦屋市到着後3隊に分かれ、駅前から山手へと寒風の中の人命検索活動である。12時に全員集合場所に戻り、冷たいにぎり飯2個と冷たい水で、コンクリートの歩道上での昼食ではあったが誰一人不平を語る者もなく、また、午後より検索に出発、日没と共に終了し帰団した。

この救援活動の数日の中で、兵庫県庁への救援物資の整理に昼の部、夜の部と任務に当たり出動した。我が消防の仲間と共の活動であった。

消防団の沈滞が危惧されている中、消防本来の目的である、自然災害から身を挺して守ってきた

先人達の情熱、心意気、さらに意気高揚が滞ることなく、この歴史に残る大震災で我が消防組織の団結を誇りに思い、若い人達の地域防災に参加できる根幹となり、消防の仲間と共に郷土の礎になればと念願しております。

歴史に残る記録誌として発刊に当たり関係する皆様にお礼申し上げます。

阪神・淡路大震災の日

尼崎市消防団
東富松分団 分団長
宮本　勉

地震・雷・火事・親父、昔から怖いもののベスト4である。とりわけ地震は対岸の火事のように思っていた。しかし、現実に阪神間に起こったのである。

ガタ、ガタ、ド、ドーン、いったい何が起こったのか？　夢うつつの中、タンスが私の上に乗っていた。家族の無事を確認し、間もなく消防無線が火災発生を知らせていた。立花町3丁目の共同住宅だ。私の勤務先北約300mである。

1階に降り台所を通るとバリ、バリという音、食器類が散乱している。玄関を出ると既に南の空に黒煙が上がっていた。分団器具庫に行くと既に団員がきて消防車を出していた。

現場に着き消火栓から放水を開始したが水圧が上がらない。他の分団から2線放水をした。横の民家にも火の手が上がった。背後から「消防の兄ちゃん、そこの家の人は、田舎に帰っていて、今、留守やねん、はよ消したって。」

必死で放水するが力及ばず炎上してしまった。後日この共同住宅からは11名の方々の遺体が確認されました。

23日、兵庫県庁へ救援物資の振り分け作業の依頼があり出動した。道中、ニュース等で見た建物の倒壊が目に飛び込んでくる。改めて自然の脅威に身が竦んだ。兵庫県庁の駐車場には全国からの救援物資が届けられていた。職員より指示された品物をトラックに積み込む。昼食時、冷たい弁当を食べながら避難されている人々の救援物資を待って居られる姿を思うと胸が熱くなっていた。

被害に遭われた方々には、今後厳しい日々が続くことでしょう。しかし、自然の力に負けないで下さい。再建を目指して努力されることを心よりお祈り申し上げますと共に亡くなられた方々のご冥福を祈り、合掌。

阪神・淡路大震災の活動報告

尼崎市消防団
東武庫分団 分団長
宮本和男

1月17日、早朝、悪夢のような出来事、我が東武庫分団は6時からガス漏れやけが人の有無の確認のための広報と共に、高齢者や女性だけの所帯の無事を確認しながら……。当地区では倒壊家屋が3軒あったが全員無事であった。

町会長から飲料水供給の依頼があり独断であったが公園に設置されている耐震性100t防火水槽の水を団員13名で1日中多くの住民に給水し、翌日も午前中はガス漏れ等の広報活動を実施し、午後は夕方まで給水活動した。更に給水支援活動としての交通整理を夜9時半まで団員10名で実施後、守部分団と交代した。

19日は芦屋市消防本部へ副団長、宮本、秋永、辰、魚住一也の4名、常吉分団員4名、計9名が車両2台で応援出動した。指定された春日町地区をローラー作戦で地域住民の安全確認を実施した。この地を見て「なんて凄い出来事だったのか。」と痛感した。翌20日も副団長、宮本、増田の3名で早朝から夜8時迄、大原町、朝日が丘等昨日同様の任務を実施した。その途中、70歳位の婦人が「震災後初めて訪ねてくれた。」と涙を流して喜んで戴いた。被害の大きな所には直ぐに多くの人が集まって来るが、小さな所へは訪ねて来る人が遅れ

たので、被災した多くの人々が消防団員の顔を見て安心されたことは不安であったのだろうと思う。

23日は武庫地区の5分団から宮本、浅堀、竹島、松井、西治の5名で夕方から23時迄兵庫県庁へ救援物資の仕分け作業の応援をしたが作業中にも地鳴りとともに震度3の余震があり全員がひやひやしながら作業を続行した。

帰路、明かり一つ無い道の為道に迷い、43号線に出てしまった。高速道路の橋脚に多くのひび割れがライトに照らされ何とも言えない不気味さを感じ、早々に2号線に出ようとしたが途中何箇所も電柱が倒れたり通行止めの所が多数有り、やっとの思いで地元武庫地区に足をいれたのは0時を大きく過ぎていた。28日も一日中芦屋市消防本部の応援でシーサイドタウン等の地域住民の安全確認を実施した。

団員の協力で事故もなく任務に就けたことを感謝します。消防団員は今回の大震災により個々の防災意識を持つことが大切、且つ必要と思いました。

阪神・淡路大震災の体験と園田第10分団の活動報告

尼崎消防団
園田第10分団 分団長
竹内 征三郎

1月17日午前5時46分地震発生。戸の内南ノ町132戸のうち、ほぼ半数が全半壊しました。戸の内町は、東は旧猪名川、西は藻川の下流にできた中州で、尼崎市内でも特に被害が大きかった地域です。消防団員17名中14名の団員にも全半壊の被害がありました。後日、住山副団長より要請があり芦屋市消防団の応援に行き、更に県庁へも救援物資の仕分けの応援にも出動した。

1月29日、藤井北消防署長から戸ノ内橋詰の水道管修理のため22時から6時まで戸ノ内一帯が断水するとの連絡を受け、徹夜で警戒をしました。

被災者の食事を朝夕2回3月20日まで一日おきに消防車で避難所へ運搬しました。朝班の者は会社を休むか遅れていき、夕方班は会社を早退して活動しました。

1月30日、正副部長会議が園田支所で開かれその最中に無線が「火災指令、場所戸ノ内町3丁目……竹内自動車工場……」慌てて第3分団の消防車で出動しました。第2分団員の協力で可搬ポンプを分団器具庫より運び出し、旧猪名川から水を取り出動した他隊との連携で無事消火できた。火災現場は南隣の工場でしたが、家族が消火器をもって活動しているのには驚きました。

幸い誰もけが人を出すこと無く消火できました。お陰で工場の消火器は一新されましたが、もし、火災が前日の夜の全面断水のときに発生していたらと考えると恐ろしい事です。

地震と火災で私の頭はパニック状態でした。協力していただいた皆様、本当にありがとうございました。

震災のすごさと救助活動に従事して

元尼崎市消防団
常吉分団 分団長
中村 孝司

そろそろ起きようと思っていると軽く揺れたような気がした。夢うつつでいると、今度はジェットコースターに乗っているような激しい突き上げと揺れに襲われた。揺れがおさまり我にかえるとタンスの下敷きになり体が動かない。

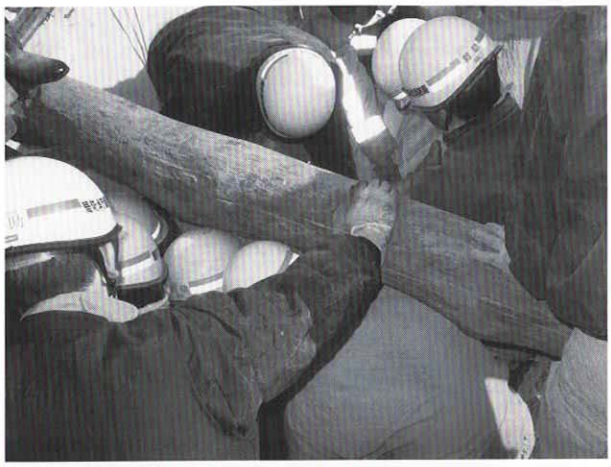
幸い顔の方は枕元の棚が止めてくれた。しかし、抜け出すのに5分位かかったと思う。大声で家族の安全を確認して外に出た。周りを見渡してみたかぎりでは家屋の倒壊はなかった。しかし東の方に煙が見えたのでパジャマ姿のままで器具庫に駆けつけた。シャッターがずれてしまい消防車が出せない。気ばかり焦り手間取っていたが村の人の助けもあって何とか出動できた。現場に着いていざ放水というところで、今度は水が出ない。断水だ。これで万事休すかと悔やんでいると殆ど水の

でない川に泥水（液状化現象？）が流れてきてぼや程度でくい止めることが出来た。消火活動を終え広い通りにでたら、常松の人が近所のアパートが倒壊して住人が下敷きになっていると知らせにきた。

受持地区の調査が終わっていないのにと抵抗があったがとにかく出動した。途中新幹線の橋桁が１m近く下がっているのを見てこれは只事でないと思った。現場は１階部分が潰れ２階の窓が目の高さに来ていて、その光景を見たとき血の気が引いた。改めて自然の凄さを思い知った。

消防団に入って15年になるが救助活動の経験はゼロである、中からは「助けて。」と人の声がする。何とかしなければ、とにかく力任せに２階の床、１階の天井を破り直径１m位の穴を開けた。我々は「のこぎり」と「バール」が欲しかった。開けた穴から住人が埃まみれになって出てきたとき、周りから拍手が起こった。この時の嬉しさは何にも例えようのないものでした。その喜びも束の間、「奥に息子がいるのです。」という言葉で重苦しい雰囲気に包まれた。我々の手に負えず救助隊を待ち一緒に活動し30分後に無事救出出来た。次々に救出された人々が病院に搬送され、当分団も西武庫病院へ患者を搬送したが病院での光景は正に野戦病院さながらであった。何処まで被害が拡がっているのだろうかと不安になりました。

一段落して器具庫に帰ったのが午後２時を過ぎていた。

あっと言う間の８時間であったが全くと言っていい程「情報」が入らず、いらいらしました。ラジオがあればもう少し情報が入ったと思います。今後消防車にラジオを搭載して大災害時には情報を流してみるのはいかがでしょうか。

私は、平成７年３月31日で退団しましたが、防災活動には今後も全力をあげ協力をして行きたいと思います。